記念碑の創るアメリカ（前編）

――「最初」の植民地・独立革命・南部――

和田光弘

はじめに

近年、アメリカ史においても、いわゆる国民化論、ナショナル・アイデンティティに関する議論が広がりを見せ、公的記憶（パブリック・メモリー）やシンボル操作など、「伝統の創出」に係わるメカニズムが分析の俎上に載せられつつある。記念碑や記念日といった記念（コメモレイション）・顕彰行為も伝統を創出するための重要な社会的装置であり、大いに関心が集まっているのも故なしとしない。[1] それらは公的記憶の結節点・表出点であると同時に、公的記憶を再生産・変容させる仕組みともいえる。したがってたとえば記念碑を一種の史料として、ある特定の歴史事象に対する人々の意識の変化、記憶の形成過程を広く読み解くことが可能となる。本稿は南部を主たるフィールドとしつつ、「最初」の植民地や独立革命を顕彰する記念碑を考察し、建国をめぐるこれらの歴史事象が後世においてなお機能するメカニズムの一端を明らかにしたい。[2] やや穿った表現を用いるならば、建国の史実は唯一度のみ生起した事象ではない。それはたえず再生産・再記憶され、アメリカ合衆国という国家を存続させるに不可欠な「伝統」を創り続けているのである。

なお、記念碑研究における方法論上の特徴として、記念行為と記念対象との時代的な乖離に留意する必要があろう。本稿で扱う記念対象は一六世紀末から一八世紀末にかけての出来事であるが、記念行為はもっぱら一九世紀末から二〇世紀前半にかけてのものとなる。記念行為の時代を専門としない筆者にはやや荷の勝ちすぎたテーマであることを承知の上で、あえて予備的な考察を試みたい。また本稿における史跡・記念碑等の「現状」は一九九七‐九八年にかけての調査時の意であり、必ずしも最新でない場合もありうることをあらかじめお断りしておきたい。

一　史跡と記念碑

記念碑について述べるためには、まずはその景観の場そのもの、

すなわちアメリカの史跡のあり方について触れるべきであろう。アメリカにおいて史跡とはいかなるものなのか、その全体像を説明する一種の定義が示されなければならないのである。連邦政府の認定した史跡の公式リスト『国選史跡登録簿(*National Register of Historic Places*)』はアメリカの主要な史跡のほとんどを網羅する包括的な典拠であるが、認定の際に満たすべき評価基準として次のような指針を挙げている。[3]「アメリカの歴史、建築、考古学、工学、文化の上で重要な地域・地区、場所、建築物、大規模建造物、小規模建造物で、それらが場所、意匠、背景、題材、技術、印象、関連性においてまとまりがあり、しかも(A)アメリカ史上重要な事件に関係している場合(そこで事件が生じていなければならない)、(B)アメリカ史上重要な人物に関係している場合(その人物が当該時期にそこに居住しているか、そこで活動していなければならない)、(C)様式・時期・手法において特徴的、もしくは技術的・芸術的に傑出、もしくは総体として重要な場合、(D)先史時代・歴史時代の重要な情報を提供している、もしくは提供する可能性のある場合」である。ただし「出生地、墓、墓地、宗教施設、移築された建築物・建造物、再建された建築物、記念碑・記念施設、当該の重要性が生じて五〇年以内のものについては通常、選考の対象としないが、それらが地域・地区に分かちがたく組み込まれ、その一部をなしている場合、もしくは以下の範疇に該当する場合は例外」とする例外規定が設けられており、「(a)建築上、芸術上、もしくは歴史上、極めて重要な宗教施設、(b)移築された建築物・建造物で建築史上極めて重要なもの、もしくは特定の人物・事件と極めて強く結びついているもの、(c)極めて重要な歴史上の人物の出生地もしくは墓で、他にその人物の活動と直接関連する適切な場所や建築物がない場合、(d)極めて重要な人物の墓を有する墓地、および年代、意匠の特徴、もしくは歴史上の事件との関連において極めて重要な墓地、(e)復元計画の一環として適切な環境・方法で再建された建築物で、他に関連の建築物・建造物が現存していない場合、(f)記念碑・記念施設で、その意匠、年代、伝統、もしくは象徴的な価値ゆえに、それ自体歴史的重要性を持つもの、(g)当該の重要性が生じて五〇年以内にもかかわらず、極めて重要なもの」などは選考の対象とされる。またここに出てくる「建築物」など、史跡の種類・区分に関する概念についても『登録簿』では厳密に定められており、表1はその定義を史跡の件数と共にまとめたものである。さらに所有形態別に分類した表2を見ると、税制上の優遇措置の効果もあって、史跡の七割以上が私有であることがわかる。[4]史跡の総数は同表の一九九四年現在で六万六千件以上となっており、これに相当するわが国の史跡の数が一九九九年現在で四千七百件余り(国指定の史跡および重要文化財の建造物、国選定の重要伝統的建造物群保存地区、国の登録有形文化財を合計した数)であることを思えば、アメリカにおける史跡の多さには驚かされる。地方(ローカル)レベルではなく、あくまでも国(ナショナル)レベルでの比較であり、しかも定義や法

表1　国選史跡登録簿における史跡の種類

種　類	件　数	%	定　義	例
建築物 (building)	45,444	73.2	主として人がその内部で活動するために作られたもの	家屋、納屋、教会、ホテル
大規模建造物 (structure)	3,232	5.2	上記以外の目的で作られたもの	橋、トンネル、ダム、船舶、機関車
小規模建造物 (object)	157	7.0	比較的小規模で簡易なもの。また主として芸術性を有するもの	彫刻、記念碑、噴水、境界線標識
場所 (site)	4,372	0.3	重要な事件・活動の生じた場所。もしくは歴史的・文化的・考古学的価値を有する場所で、現存する建築物・建造物の価値を問わない	---
地域・地区 (district)	8,898	14.3	建築物・建造物・場所が歴史的・芸術的に集中・統合されているもの	---

National Register of Historic Places, 1966 to 1994 (Washington, D.C., 1994), p. viii より作成。

表2　国選史跡登録簿における史跡の所有形態

所有形態		件数	%
公有	連邦政府	3,943	5.9
	州政府	3,645	5.5
	地方自治体	11,715	17.6
私　有		47,361	71.0
計		66,664	100.0

National Register of Historic Places, 1966 to 1994, p. vii より作成。

制度による違いが大きいとはいえ、短い歴史をその大地に残そうとするアメリカの熱意をそこに感じ取ることができよう。一三の植民地がいわば「偶然」に寄り集まってスタートした人工国家であるがゆえ、アメリカは国民統合のために過ぎ去った歴史を常に動員し続けなければならないのであり、本稿で分析の俎上に載せる「最初」の植民地や独立革命は、その国創りのまさに嚆矢であるがゆえ、南北戦争と並んで数多くの史跡が整備され、顕彰・記念の対象とされているのである。

それではこのような史跡に屹立する記念碑とは、そもそもどのように捉えうるのか。呼称、さらには社会的機能に応じて分類をほどこす必要があろう。記念碑の呼称には、monument（記念碑）、memorial（慰霊碑）、marker（記念標柱）[6]、plaque（記念プレート）などが見られるが、後者の二種についてはともかく、前者二種には形態上の明確な差異は認めにくい。monumentが勝利や匿名性を含意しているのに対し、memorialは悲しみや犠牲を表現し、死者の名を刻印している点において、より墓碑に近いともいえる。また前者の石材は概して白く、大地に高く屹立しているのに対し、後者はしばしば黒く、たとえばヴェトナム戦争慰霊碑のように地面より低い場合もある。[7] ともあれこのような呼称上の分類はむろん国や言語によって異なるものであり、括弧内の訳は一応の目安にすぎない。コンテクストによっては、より広義・狭義の意味合いを帯びうる点にも留意したい。

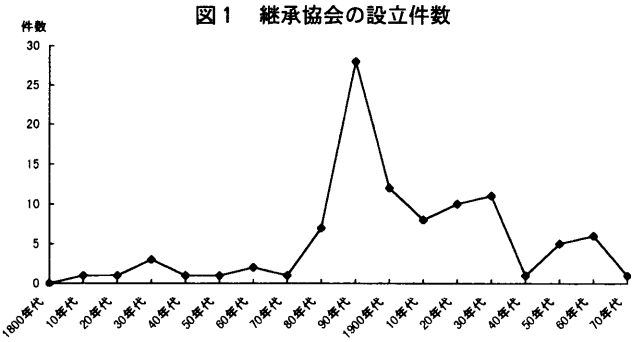
一方、社会的機能にもとづく史跡・記念碑の分類は、K・フットの研究が重要な手がかりとなる。[8] アメリカにおける記念碑研究をリードする地理学者のフットは、暴力や悲劇と関連した広義の記念碑を次のように四種類に分類してみせる。「聖別（sanctification）」「選別（designation）」「復旧（rectification）」「抹消（obliteration）」である。「聖別」とは特別な英雄・犠牲者に捧げられた記念碑に見られる社会的機能で、碑は通常、広い記念施設内に設置され、記念日には記念祭などで繰り返し顕彰の対象とされる。「選別」は「聖別」ほど重視されていない英雄・犠牲者の記念碑で、神聖さの点でやや劣る場合である。むろん重要ではあるが、記念祭などはおこなわれないケースといえる。「復旧」は一時的に注目の的となるものの、やがて忘れられ、当該場所が史跡として残らず、通常の使用に復帰する場合である。記念碑は建っているが、いわゆるmonumentやmemorialではなく、記念標柱や記念プレートのみが片隅に置かれている場合が多く、歴史上の意味が付与しにくい事故や災害などの犠牲者を慰霊するケースが主としてこれに該当する。四番目の「抹消」は前者三つと異なり、完全に記憶から消される場合、つまり「マイナス」の意味での記念行為を指す。たとえば犯罪の現場や重罪人の生家など忌まわしい記憶と関連する建造物が根こそぎ取り払われ、その土地にまつわる以前の記憶が完全に消し去られるようなケースといえる。むろん地元の人々の集団記憶の中では命脈を保ち、口伝されるものの、記念碑というかたちに結実することはない。

四

たとえばセイラムの魔女狩りで無実の人々が処刑された「首吊りの丘」に記念碑の類が一切見られないのは、この「抹消」の例である。ともあれこのように四種類に分類される記念碑・史跡は、その顕彰する歴史事象が再解釈されることでカテゴリー内を移動することもありうる。つまり「選別」されていた記念碑が「聖別」されるようになる、また逆の事態が生じるなど、時代とともに動きうるのであって、四分類は恒久的な「レッテル」ではなく、あくまで「目盛」にすぎないといえよう。

分類という、いわば記念碑の「あり方」について見てきたが、次に記念碑の「造られ方」について触れておきたい。アメリカ史上、記念碑の建立を担った主体の変化には一定のパターンが認められる。世界的に見て記念碑の建立が盛んになったのは一九世紀後半（特に世紀末）から今世紀前半（特に初頭）にかけてであるが、この国の場合もむろん例外ではない。まず各地に地元の名士によって様々な史跡保存協会・記念協会の類が創られ、記念碑建立を含む顕彰行為がおこなわれ、それと平行して、またその役割を受け継いで、世紀末から多くの「継承協会（hereditary society）」が活動を始め、記念碑建立はまさに一大ブームの観を呈するに至るのである。継承協会とは祖先に関して一定の条件を入会資格とする団体で、主として初期移民の子孫たちからなる白人の愛国組織であり、図1に示したように世紀転換期に急増している。[9] 祖先という、本人では如何ともしがたい条件を要求し、古くからアメリカに居住する白人同士が

図1　継承協会の設立件数



Ralph M. Pabst, ed., *The Hereditary Register of the United States of America* (Phoenix, 1976), 761-763より作成。

表3　継承協会の入会資格

継承協会	女性	年齢	祖先に関する条件
アメリカ革命の娘たち (1890)	x	18歳以上	独立のために戦った将兵、愛国者、援助者
アメリカ植民地の婦人たち (1891)	x	---	1750年以前に植民地に移住し、1776年7月5日以前に祖国に功績のあった者 (1)
アメリカ植民地人の娘たち (1920)	x	18歳以上	1776年7月4日以前に植民地の公務・軍務に携わった者 (2)
植民地戦争の娘たち (1932)	x	18歳以上	ジェイムズタウン建設 (5/13/1607)からレキシントンの戦い (4/19/1775)までの間の将兵・政治家・役人 (3)

括弧内は全国協会の設立年。(1) 独立宣言署名者、植民地政府の要職にあった者、建国に大いに貢献した者を含む。(2) 養子の子孫を除く。(3) 植民地の英国軍人も含む。
Pabst, ed., *The Hereditary Register of the United States of America*, 119, 134, 302, 336-337より作成。

結集したのは、いわゆる新移民の増加など、当時の急激な社会変化に対する保守的白人のリアクションの一形態といえよう。さらに継承協会には女性のみをメンバーとしたものも多く、表3はそのいくつかについて入会資格をまとめたものである。女性運動の興隆という背景があるとはいえ、愛国主義を女性の地位向上に用いようとする一種の戦略がそこには見え隠れしている。なかでも「アメリカ革命の娘たち(DAR)」の政治的影響力は絶大で、当時は強力な圧力団体であった。[10] 今日では会員数も減り、もっぱら老婦人の親睦会の風情であるが、往時においても地方の支部について言えば、白人女性の社交クラブと評しても決して間違いではない。地元の支部に集まる女性たちは愛国的ではあるが必ずしも政治的というわけではなく、自分たちの祖先や郷土の英雄・歴史を顕彰し、記念碑を次々に建立するヴァナキュラーな親睦組織の一員にすぎなかった。しかし多くの支部の活動は、ピラミッドの頂点に位置する中央本部「全国DAR(NSDAR)」において集約され、一定の政治的方向づけがなされる。つまり地方のヴァナキュラーな顕彰活動のエネルギーは、組織のピラミッド構造を通じてナショナルな「公式文化」に巧みに接続される仕組みであった。NSDARの壮麗な建物がホワイトハウス隣りの一七七六番地を占め、年次総会が「大陸会議」と呼ばれるのはきわめて象徴的であろう。

さらに一九三〇年代に入ると、国立公園局という内務省管轄下の政府組織が直接に、「正史(ナショナル・ヒストリー)」にとって重要な史跡の管理に乗

表4　「最初」のイギリス植民地

植民地	現在の名称		設立年	国選史跡登録簿(1994年)のデータ		
				評価基準	登録年	管理形態
ロアノーク植民地	Fort Raleigh National Historic Site		1941年 (1990年拡張)	A,D,e	1966	NPS
ジェイムズタウン	東部	Colonial National Historical Park (Jamestown Unit)	1930年 (1936年改名)	A,C,D,f	1966	NPS
	西部	Jamestown National Historic Site	1940年	A,D,f	1966	NPS*

評価基準のアルファベットは、第1章で論じた『国選史跡登録簿』の評価基準に対応。NPS：National Park Service

＊：ヴァジニア史跡保存協会（The Association for the Preservation of Virginia Antiquities）が所有し、国立公園局とともに管理・運営。

り出すことになる。[11] 今日、アメリカの国立公園体系は世界各国の手本ともなっているが、そもそも国立公園局の設立は一九一六年、自然保護を主眼としたものであった。しかし一九三〇年代、史跡法（一九三五年）の制定を契機として歴史への介入・侵入を開始する。それはいわば史跡を通じて国の手による記憶の公的管理であり、管轄下の史跡内において民間の記念碑建立は抑制されてゆくことになる。

以上、記念碑・史跡をめぐるアメリカの一般的状況を見てきたが、本稿では建国にまつわる記念碑を考察するに当たって、先述したように南部に注目したい。南北戦争後、不遇をかこち続けた南部の大地に立つ記念碑は、当該歴史事象の全体像を逆光の中に浮かび上がらせる効果が期待されるからである。まずは「最初」の植民地たるロアノーク島（ノースカロライナ州）とジェイムズタウン（ヴァジニア州）を俎上に載せたい（表4）。

二　「最初」の植民地の記念碑

（一）　失われた植民地ロアノーク

ロアノーク島は合衆国で唯一、エリザベス朝期にまで遡る最古のイギリス人入植地であり、文字どおり英領植民地の「最初」といえる。ただしジェイムズタウンが幾度かの消滅の危機を乗り越えて存続した「最初の恒久的」植民地であるのに対し、「失われた植民地（ロスト・コロニー）」ロアノークは謎を残したまま消え去ったため、現在の合衆国と直接の血のつながりは認めにくい。したがって「最初」の意味するところはやや曖昧とならざるをえない。またロアノークにしろジェイムズタウンにしろ、植民地時代そのものの合衆国史上における位置づけ、すなわち植民地時代史のナショナルな意味合いについての解釈の変化によっても「最初」の含意は変化しうる。[12] そこでまず顕彰行為の考察に先立って、両者がアメリカ史の概説書においてどのように表現されて来たのか、確認しておくことにしたい。ただし周知のようにロアノークの場合、一五八五―一六〇二年にかけて試みられた複数回の探検・植民プロジェクトであるため、どこかに焦点を当

表5　ヴァジニア・デアとジェイムズタウンに関する記述

	J・マーシャル *The Life of George Washington* (1804年)	A・ホームズ *Annals of America* (1829年)	C・レスター *Our First Hundred Years* (1875年)	A・リチャードソン *The History of Our Country* (1875年)	W・ウィルソン *A History of the American People* (1902年)
ヴァジニア・デア	First child of English parentage born in America (本文、p. 13)	First English Child born in America (小見出し、p. 106)	First child of English parents born on the soil of the United States (本文、p.33)	First Christian child ever born on this continent (本文、p. 64)	-----
ジェイムズタウン	First indications of a permanent settlement (本文、p. 24)	First permanent settlement in Virginia (章題目、p. 126)	Permanent colonization of Virginia (節題目、p. 39)	First permanent English settlement (章題目、p. 74)	First permanent English settlement in America (本文、p. 34)

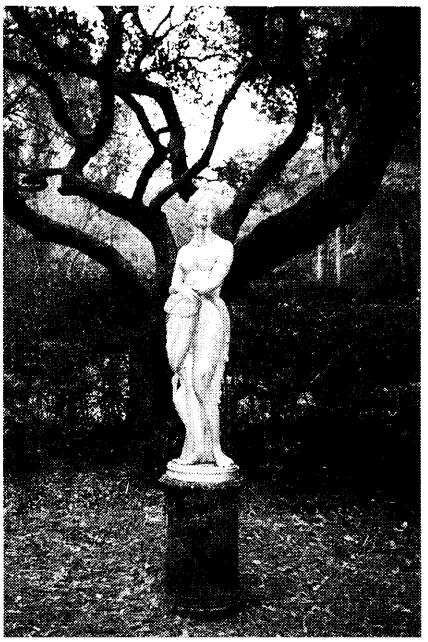
それぞれ、全5巻の第1巻、全2巻の第1巻、全1巻、全1巻、全5巻の第1巻。

てる必要がある。ここではアメリカで生まれた「最初」のイギリス人とされるヴァジニア・デアに注目したい。一五八七年の第二次植民団を率いた総督ジョン・ホワイトに同行した愛娘エレナ・デアが新大陸で生んだ女児である。物資補給のため、入植団をロアノークの地に残して同年本国に引き返したホワイトは、アルマダ海戦の余波を受けて再渡航がままならず、ようやく一五九〇年にロアノークに戻った時には入植者たちは何処ともなく消え去っており、近隣に遺体らしきものは見出されず、彼の娘や孫娘の行方も杳として知れなかった。そのためとりわけ幼いヴァジニア・デアをめぐって、後世の人々の想像力が掻き立てられたのである。興味深い例を挙げれば、今世紀に入ってエレナ・デアが文字を彫ったとされる石が発見され、一部の学者らによってお墨付きが与えられたが、のちに捏造されたものであることがわかるなど、入植者の運命を物語る確固たる証拠・史料はいまだ見出されていない。[13]

ともあれ、表5はヴァジニア・デアとジェイムズタウンに関する記述を、いくつかのアメリカ史の概説書から拾い出したものである。ここで取り上げた概説書は、いずれも郷土史の類ではなく、全国である程度広く読まれたと考えられるものを中心に選定している。出版時期にも留意して、最初のマーシャルの著書からホームズの著書までがちょうど四半世紀、ホームズから次のレスター、リチャードソンまでがほぼ半世紀、さらにウィルソンまでがほぼ四半世紀というように等間隔を意識して挙げてある。以下、各著作・著者についてごく簡単に解説を加えておきたい。まず最高裁長官ジョン・マーシャルの手になるワシントンの公式な伝記『ワシントン伝』全五巻[14]であるが、実はワシントンに関する記述はようやく第二巻から始まり、第一巻は一五世紀末のカボットの探検より独立革命前夜（初版では一七六〇年代、改訂版では一七七〇年代）までを扱った最初期のアメリカ史概説となっている。次の*Annals of America*[15]の著者アビエル・ホームズ（一七六三―一八三七年）はマサチューセッツ州ケンブリッジ在住の牧師で、イェール大学、ハーバード大学、エジンバラ大学などで学位を得ており、初期アメリカ史に造詣が深く、

図2　ロアノーク植民地とヴァジニア・デアを顕彰する記念碑（筆者撮影）

図3　エリザベス朝庭園内のヴァジニア・デア像（筆者撮影）



彼の代表作たるこの著作は当時の"standard authority"と評されている。[16] チャールズ・E・レスター（一八一五―一八九〇年）[17] はジョナサン・エドワーズの母方の子孫としてコネティカット州に生まれ、神学を修めて牧師の職に就いたが肺病のために辞し、一時は奴隷制反対運動にも関わっている。イタリアはジェノバの領事を六年間勤め、帰国後はニューヨークに居住して執筆活動に専念した。数多くの著作をものしているが、この*Our First Hundred Years*[18] は文字どおり独立百周年を期して上梓されたものである。アビィ・S・リチャードソン（一八三七―一九〇〇年）[19] の手になる*The History of Our Country*[20] も同年の出版で、二人の息子への献辞には愛国心の涵養が強調されている。ウッドロウ・ウィルソンの*A History of the American People*[21] は彼の歴史学者・教育者としての一面を余すところなく示す著作である。ファクシミリの図版を多用するなど、教育上の配慮が大いに窺われる書物であるが、本文の比重と比してあまりに図版が多い点や、図版の内容がきわめて好事家的かつ愛国主義的である点など、彼の歴史観を端的に物語って非常に興味深い。

ともあれこれらの著作はいずれも――ウィルソンを除いて――、ヴァジニア・デアをアメリカで生まれた「最初」のイギリス人として高く評しており、このような意識が少なくとも一八・一九世紀を通じて一般的であったことが窺われる。したがってヴァジニア・デアの顕彰はあくまでもかかる評価・認知を大前提としたものであり、必ずしも強引な伝統の「創造」というわけではないが、彼女を足掛かりとして具体的な歴史の場たるロアノーク植民地の史跡の保存・顕彰がおこなわれ、そこには地元・州の様々な活動が見出されるのである。図2は一八九六年に建立され、現在の「ローリー砦国立公

表6　ロアノーク植民地関連の史跡保存協会・歴史協会

番号	協　会　名	活動期間	中心人物
1	Virginia Dare (Columbian) Memorial Association	1892-1894	S. S. Cotten
2	Roanoke Colony Memorial Association	1894-1942	E. G. Daves
3	Roanoke Island Celebration Company	1903-1904	W. J. Peele
4	Roanoke Island Historical Association	1932-	W. O. Saunders

表7　ヴァジニア・デアをタイトルに掲げた文学作品

出版年	著　者	タ　イ　ト　ル	出　版　地
1892	E.A.B.Shackleford	*Virginia Dare: A Romance of the Sixteenth Century*	NY, NY
1901	S. S. Cotten	*The White Doe: The Fate of Virginia Dare, An Indian Legend*	Philadelphia, PA
1937	Id. (リプリント)	*The Legend of Virginia Dare*	Manteo, NC
1975	Id. (リプリント)	*The White Doe: The Fate of Virginia Dare, An Indian Legend*	Murfreesboro, NC
1904	W. H. Moore	*Virginia Dare: A Story of Colonial Days*	Raleigh, NC
1908	M. V. Wall	*The Daughter of Virginia Dare*	NY, NY
1909	H. R. Latimer	*Virginia Dare, and Other Poems*	Baltimore, MD
1937	P. B. Scharff	*Virginia Dare March*	Wanchese, NC
1940	M. Fiske	*This Heritage, A Play concerning Eleanor Dare ...*	Gainesville, GA
1957	A. Stevenson	*Virginia Dare, Mystery Girl*	Indianapolis, IN
1988	W. H. Hooks	*The Legend of the White Doe*	NY, NY
1993	J. Beam	*A Briefe and True Report: For Virginia Dare*	Hillsborough, NC

園」内に設置されている唯一の記念碑である。碑文は二段に分かれており、前半がロアノーク植民地、後半がヴァジニア・デアを顕彰したものとなっている。また図3は同国立公園に隣接する「エリザベス朝庭園」内に置かれたヴァジニア・デア像である。ヴァジニアはしばしばインディアン女性の装いをした姿や白い雌ジカとして描かれるが、この大理石像も先住民部族の中で育った女性として彼女を表現している。この像は大英博物館でロアノーク植民地の話を知った女性彫刻家マリア・L・ランダーが一八五九年に制作したもので、輸送船が沈没して海底で二年間眠りにつくなど数奇な運命を経て、一時はノースカロライナ州議事堂内に設置されたが、最終的には劇作家ポール・グリーン――一九三七年に『失われた植民地』の劇を書き上げた――によって、この庭園に寄贈された。この設置地点はグリーン自らがインスピレーションを得て、かつてヴァジニアが遊んだ場所として選定したという。ノースカロライナ人にとって彼女は一種神聖な存在であり、彼女と何らかのえにしのあることは家系の古さをも意味して、誇るべき証しなのである。しかしこのような意識は自然発生的に生じたものではない。そこには地元・州の様々な組織による、意識的な記憶の再構築の過程があった。

表6はかかる役割を最も積極的に担った史跡保存協会・歴史協会をリストアップしたものである。[22] 1はシカゴ万博を機に創られたもので、ヴァジニア・デアの顕彰という趣旨もあって女性をメンバーとした協会である。いわゆる継承協会とは異なるものの、愛国的な

女性団体という点では性格がきわめてよく似ている。中心人物はノースカロライナの名士たる女性、コッテン夫人であり、協会では書記を務め、非常に精力的な顕彰活動を展開した。この協会は二〇年の期限付きで設立されたが、一八九四年には事実上活動を停止している。2は先述した唯一の記念碑を設置した協会である。3の協会(会社)は一九〇五年のロアノーク植民地記念祭開催を目指し、高い理想を掲げて設立されたが、一九〇七年のジェイムズタウン三〇〇周年記念祭の準備活動に関心と資金を奪われて十分な設立資金を集めることができず、事実上失敗に帰したプロジェクトである。ただしこの協会のメンバーはジェイムズタウンの記念祭に加わり、そのディスプレイの中にはロアノーク植民地に関するものも含まれていたとされる。これは「最初」の権威と記憶上の位置づけをめぐって、ロアノークとジェイムズタウンが合い争った好例であり、やはりナショナルレベルでの価値を強く主張するジェイムズタウンには勝てなかったことがわかる。4は今日まで続く学術的な歴史協会である。この他、ヴァジニア・デアを会の名称としたものとして、一八九一年設立のVirginia Dare Institute (Concord, NC)、一八九三年設立のVirginia Dare Book Club (Charlotte, NC) などがあり、1や2とも合わせ見ると、やはり一九世紀末に一つの大きな関心の高まりが生じたことが分かる。この動きはロアノーク保存に関する連邦法制定の試みや[23]、学術的モノグラフの発表[24]、文学作品の上梓など、非常に多岐にわたっている。特に表7に掲げたコッテン夫人の一九〇一年の著作は、「失われた植民地」のストーリーを広めるのに大いに貢献している。この他、関連した主な動きを年代順にいくつか列挙するならば、たとえば次のような例が指摘できよう。

一九二一年にサイレント映画*The Lost Colony*がAtlas Film Corporationによってローリー砦跡で撮影され、この映画を製作したノースカロライナ州公教育課によれば、都市部と農村部の子どもたちの教育水準を平準化させることが映画の目的であり、ロアノーク植民地のテーマはデア郡教育長M・ジョーンズ自らが選定したという。郷土愛の対象としてのロアノーク植民地が、映画という新たなメディアを通じて教育の場に入り込んでいく様子が分かる。記憶の形成に寄与する教育教材という点では、J・ウェイランドの*History Stories for Primary Grades*[25]もヴァジニア・デアに関する章を含み、一九二〇年発行の*North Carolina Teacher*[26]には、W・スティーンの手になるヴァジニアの洗礼シーンの絵の複製が掲載されている。一九三一年にはポール・グリーンやRoanoke Island Historical Committee(表6—4の前身)のメンバーが、のちにグリーンの劇『失われた植民地』が演じられるウォーターサイド劇場(ローリー砦国立公園に隣接)の建設場所を調査し、同年八月一八日(ヴァジニア・デアの誕生日、ヴァジニア・デア・デイ)にデア郡のホームカミングが開催された。ヴァジニア・デア生誕三五〇周年の一九三七年には数多くの記念行事が挙行され、Roanoke Colony Memorial Association とRoanoke Island Historical

Associationが協賛した高校生向けの企画もあった。[27] 同年の独立記念日からは『失われた植民地』が上演され、その年のヴァジニア・デア・デイにはF・D・ルーズヴェルトも観劇に訪れている。以後この劇は、今日に至るまで毎夏、ウォーターサイド劇場で演じられることになる。[28] さらに四〇〇周年の一九八四年にはRoanoke Island Historical Associationの主催で記念行事が催されている。[29]

このようにヴァジニア・デアを担ぎつつ、史跡の整備、劇、イベント、出版物によってロアノーク植民地の顕彰活動がおこなわれ、かかる地元・州のプライドの発露によって、ノースカロライナのロアノークは、「最初」の植民地としてナショナルな記憶へと接続されてゆくことになったのである。

(二) 恒久的植民地ジェイムズタウン

次にもう一つの「最初」の植民地たるジェイムズタウンについて見てみたい。先述したようにジェイムズタウンは最初の恒久的な英領北米植民地であるため、ここで最初に生じた事柄は「合衆国で最初」に直結しうる。たとえばここで最初に開かれた議会は、アメリカ最初の議会と位置づけられうるのである。そこでまずはロアノークの場合と同じように、あらかじめアメリカ史の概説書におけるその位置づけを探っておきたい。

再度表5に目を転じ、まずマーシャルのジェイムズタウンに関する表現をみると、これはイギリス人の植民の開始に対して先住民が敵意を持って応じたことを述べるくだりに出てくるものであり、本文中での説明はかなり簡略といえる。[30] しかし小見出し（二四頁）には五月一三日というジェイムズタウン上陸の日付が特記されていることから、すでに日付自体が意味を持つに至っていることが推察される。ホームズの場合は、本文の表現も合わせて考えるならば、[31]「ヴァジニアで初めて」という点が強調されているわけではなく、むしろ単にその位置がヴァジニアであったという情報を与えているに過ぎないと想定される。つまりやはり「最初」に重点が置かれているのである。一方、レスターの著作では、章題目、本文ともに"first"の記述がなく、[32] あくまでも「ヴァジニアの植民」という点が強調されている。奴隷制反対運動に携わっていたニューイングランド人というレスター自身の属性によるものなのか、彼は明らかにプリマスの方を強調しようとしている。ロンドン会社とプリマス会社の特許状について述べたくだりからも、それははっきりと確認できる。[33] ただしリチャードソンやウィルソンの著作においては、ジェイムズタウンはやはり「最初」であり、ある程度ナショナルな評価を得ているといえる。またレスターを含むいずれの著作においても、ジェイムズタウンはプリマスよりも先に叙述されている――ほぼ年代順の記述形式からして当然とも言えるが――点にも留意したい。ただし合衆国という国家の嚆矢として捉えられているかといえば、植民地時代史自体の意義付けの変化もあって、必ずしもメイフラワー号ほどポピュラリティを得ているとは言いがたい。メイフラワー号

表8　ジェイムズタウンの記念碑

番号	建立年月日	建　立　者	記　念　対　象
1	1907	アメリカ合衆国	ジェイムズタウン300周年(Jamestown Monument, Tercentenary Monument)
2	1912	APVA	5/3/1893にAPVAに土地を寄付した地主夫妻
3	1922	APVA	ポカホンタス（W. O. Partridge 作の立像）
4	1907(1909)*	APVA	ジョン・スミス（W. Couper 作の立像）
5	7/30/1907	APVAのノーフォーク支部	最初の代議会の開催
6	1928	The Society of the Daughters of Colonial Wars	ジェイムズタウンにおけるイギリスの祖先達の英雄的行為
7	6/15/1922	CDA(VA)	ヴァジニア植民地最初の国教会牧師Robert Huntによる最初の聖餐式（Robert Hunt Shrine）*
8	6/15/1965	Magna Carta Commission of Virginia	マグナカルタ750周年（ヴァジニアカシの植樹）
9	1957	APVA	「飢餓の時期」に死亡した約300名の墓地の上に建立（Memorial Cross）
10	1925	The National Society, Daughters of the American Colonists	17世紀後半の植民地政府の建物（3rd & 4th Statehouses）の基礎を囲む鉄柵*

＊ 4：記念碑には1907年と刻まれているが、実際に建てられたのは1909年。＊7：タブレット本体はヴァジニア、南ヴァジニア、西ヴァジニアの教区によって1907年に提供された。タブレットを含む「神殿」は南ヴァジニア教区主教の監督のもと、APVAに委ねられた。＊10：鉄柵の中にも、基礎の発掘を記念する碑が建っている。
APVA : The Association for the Preservation of Virginia Antiquities
CDA(VA): The Society of the Colonial Dames of America in the State of Virginia

やプリマスが感謝祭で記憶されたのとは対照的に、ジェイムズタウンはそのようなナショナルな記念日と関連付けられなかったために、アメリカ人の記憶のなかで「最初」の植民地として成熟せず、南部もしくはヴァジニアというローカルな色彩を色濃く残してしまったともいえる。

では具体的にジェイムズタウンの史跡に建立・設置された記念碑について見てゆくことにしたい。調査結果をまとめたものが表8である[34]（メモリアル・チャーチ内の記念プレートについては後述）。ここで記念碑建立の中心的役割を果たしているのは一八八九年に設立された「ヴァジニア史跡保存協会（APVA）」であり、州内全域をカヴァーする史跡保存協会としては全米最古の組織である[35]。現在、ヴァジニア州内で三四ヶ所の史跡を所有・管理し、二三の支部を傘下に収めている（かつてはニューヨーク、フィラデルフィア、テネシーにも支部を有していた）。ジェイムズタウン西部の土地もこの協会の所有であり、この地を舞台とした精力的な発掘調査活動は、ここが協会のいわば発祥の地であることと無関係ではない。APVAの所有地内には協会の理事の屋敷（その名もYeardley House）が置かれているが、これは「アメリカ革命の娘たち」の本部（NSDAR）が出資して一九〇七年に建てられ、APVAに寄贈されたものである。やや先走るが表10の記念プレートも含めて、この地において優勢な継承協会はDARではなく「アメリカ植民地の婦人たち（CDA）」であり（表3参照）、このYeardley House

はDARがかろうじてジェイムズタウンに介入できた例といえる。史跡保存協会たる（つまり継承協会ではない）APVAとの関係のなかで、複数の継承協会が「記憶の縄張り」をめぐって競合する様子が伺えて非常に興味深い。

さてこの表8を一見して明らかなように、この地には一九〇七年（三〇〇周年）以前の記念碑は存在しない。つまりアメリカで「最初」をうたうわりには、記念碑はかなり新しい。APVAの土地獲得が一八九三年であるからそれ以前には遡り得ないとはいえ、ジェイムズタウンが――少なくともその史跡が――比較的新しく「再発見」もしくは「再解釈」されたことがわかる。さらに建立時期のサイクルを見ると、1・4・5が三〇〇周年、9が三五〇周年、2は三〇五周年、3・7は三一五周年となり、直線的な時間の流れの中で一定の区切りを意識する西洋伝統の思惟方法にもとづいていることも確認できる（ちなみにわが国における明治維新までの伝統的な暦法は、むろん中国の影響を受けて六〇年を単位として循環するものである）。

図4　ジェイムズタウン300周年記念碑（筆者撮影）

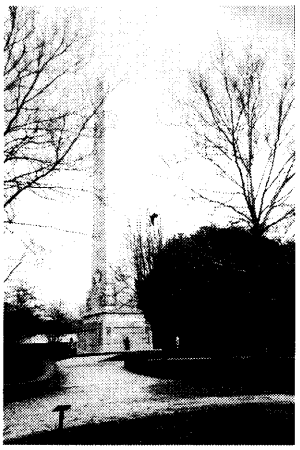


表4にも示したように、そもそもジェイムズタウンという史跡は、国立公園局の所有する東部の土地――いわば「公式文化」を代表する――と、民間団体たるAPVAの所有する西部の土地――「ヴァナキュラー文化」を意味する――が隣接しているために、記念碑・記念行為への対応の差異が最も明瞭に認められる。たとえば1と2以外の記念碑はすべてAPVAの所有地内にあり、しかも2は所有地の入り口に位置していることから事実上APVAの領域内といってよく、国立公園局の土地――APVAの所有地よりも遥かに広い――に建つ記念碑は、合衆国政府が建立した1（図4）のみである。この事実は基本的には国立公園局の管理下において私的な記念碑の建立が抑制される傾向にあることを意味しているが、史跡を通じての記憶の「公的管理」という観点からするならば、「公式文化」側が「ヴァナキュラー文化」による公的記憶への介入を妨げようとしているとも解釈できる。民間に自由に記念碑を造らせては、「正史」の確立はままならないというわけである。むろん1の記念碑自体が国家によるジェイムズタウンの評価を如実に示すものであり、「イギリス人の最初の恒久的な植民地にしてヴァジニアと合衆国の誕生の地」なる碑文が、国家による記憶の創造の決意を端的に物語っているといえよう。

次に、今や一種の「顕彰の神殿」と化しているメモリアル・チャーチに注目したい。表9に示したようにジェイムズタウンの教会は一八世紀半ば以降の長い歴史的空白期間を経て、このメモリアル・チャー

表9　ジェイムズタウンの教会

教　会	構　造	位　置	期　間	関連事項
第1教会	木造	砦内	1607年晩夏ないし初秋に完成。1608年1月焼失	
第2教会	木造	砦内	1608年再建	ポカホンタスとロルフの挙式(1614年4月)
第3教会	木造*	現在位置	1617年建立	最初の代議会の開催(1619年7月30日－8月4日)
第4教会	レンガ造り	現在位置	1639年1月起工。1647年11月の時点で未完成。1676年9月、ベーコンの反乱で焼失	教会完成後、チャーチ・タワーを付設。教会焼失時も無事
第5教会	レンガ造り	現在位置	再建され、遅くとも10年後には完全に機能回復。1750年代に遺棄	遺棄後、レンガが持ち出され、1790年代までに教会は廃虚に。チャーチ・タワーは残る
メモリアル・チャーチ	レンガ造り	現在位置	1906年にNSCDAが建立。1907年5月13日にAPVAに寄贈	

＊基礎は丸石の上にレンガを一層載せた1フィート幅のもの

表10　ジェイムズタウンのメモリアル・チャーチ内の記念プレート

番号	設置年月日	設　置　者	記　念　対　象
1	1931	Thomas Savageの子孫たち	ヴァジニア「東海岸」への最初の白人入植者Thomas Savage
2	1929	The Friends of the Classics in America (The Classical Association of Virginia後援)	最初のアメリカの詩人George Sandys
4	1950	The Medical Society of Virginia	ヴァジニア植民地総督でもあった医者John Pott
7	---	CDA(VA)	キリスト教に改宗したインディアンで、ジェイムズタウンをインディアンの襲撃から救ったChanco
8	1926	The Tobacco Association of the U.S.	最初にタバコの栽培に成功したジョン・ロルフ
9	5/13/1907	NSCDA	ジェイムズタウン300周年
10	---	CDA(VA)	1607- 98年の総督、参議会議長のリスト
11	---	---	ポカホンタス
12	5/*/1907	APVAのワシントン支部	ジョン・スミス
13	5/17/1959	The Virginia State Bar	イギリスのコモン・ローがアメリカで最初に確立
14	---	CDA(MASS)	ヴァジニアのプランターで、のちにマサチューセッツのために活躍したDaniel Gookin少将

設置者が銘記されているもののみ(11は例外)
NSCDA : The National Society of the Colonial Dames of America
CDA(MASS) : The Massachusetts Society of the Colonial Dames of America

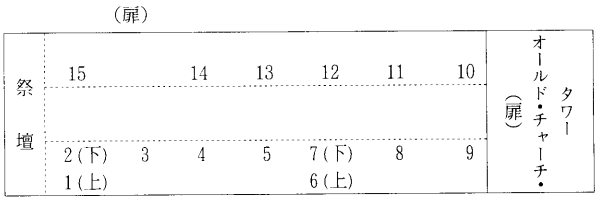
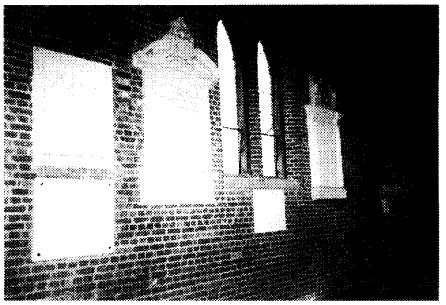


図5　メモリアル・チャーチの入口に聳えるオールド・チャーチ・タワーの遺構（筆者撮影）

図6　メモリアル・チャーチの内部（筆者撮影）。祭壇に向かって左の壁面。表10の1～7の記念プレートが見える。



チ建立に至っている。つまり最初の植民地議会が開かれた一六一七年建立の木造の教会、およびそれを壊して一六三九年から建てられたレンガ造りの教会、この両者の基礎の上に今日のメモリアル・チャーチが建てられており、一九〇六年にCDAの本部（NSCDA）が建立し、一九〇七年五月一三日にAPVAに寄贈されたものである。ここにもやはり継承協会と史跡保存協会との微妙な関係が窺われる。APVAのパンフレットはこの教会を「建国の象徴」と述べるが、とりわけオールド・チャーチ・タワーの遺構部分（図5）はジェイムズタウン＝「最初」のシンボルであり、APVA自体のシンボルともなっている。

さてこの教会の内部に目を移し、そこに掲げられた多くの記念プレート（図6）をまとめたのが表10である。記念プレートの位置関係についても表の下部に示している。教会自体が三〇〇周年を記念して建てられたため、一九〇七年以前のプレートはむろん存在せず、最も古いもので三〇〇周年を記念した9および12という点は表8の場合とよく似ている。プレートという比較的手軽な顕彰手段であるためか、ジェイムズタウン内に散在する記念碑以上に、各種関係団体が各々様々な「最初」を顕彰していることがわかる。ここには「最初」のイデオロギーの存在と、それに依拠する地域のプライドが明瞭に見て取れるのである。つまりここでの「最初」がアメリカで「最初」となりうることから、地元のプライドは容易にナショナルなプライド、ナショナルな記憶へと直結しうる。この事実は、やや先走って言えば、ローカリズムはナショナリズムの防波堤たりえない、のみならず両者が強い親和性を有していることを示唆しているとも解釈できよう。

最後に、記念碑との関連において重要な記念日の祝祭、すなわちジェイムズタウンの記念祭（Jamestown Jubilee）について見ておきたい。[36] 入植の記憶がようやく歴史となり始めた一〇〇周年（一七〇七年）、当時のヴァジニア総督が記念祭を提案したが、これは

結局実現しなかった。一世紀後の二〇〇周年（一八〇七年）には記念祭が開催され、近隣のノーフォーク、ピーターズバーグ、ポーツマス、ウィリアムズバーグから市民が集まり、記念の演説のほか、小艦隊も沖に来航したという。一八二二年には「ヴァジニア祭(Virginiad)」が開かれ、演説家やウィリアム・アンド・メアリ大学の学生による演説がおこなわれた。一八二四年にはラファイエットのアメリカ再訪を機に祝典が開かれている。二五〇周年（一八五七年）には六千ないし八千人が祝典に参加し、前大統領のジョン・タイラーの演説や、軍隊のパレードがおこなわれた。三〇〇周年（一九〇七年）は表8・表10で見たようにジェイムズタウン顕彰の一大転機であり、ジェイムズタウン博覧会（Jamestown Exposition）がノーフォークで――ジェイムズタウンでは狭すぎるため――非常に盛大に開催された。セオドア・ルーズヴェルトも臨席し、イギリス、フランス、ドイツ、日本の海軍も参加するなど国際的な行事となった。この博覧会は新南部の経済発展を祝う意味も含まれていたため、三四〇エーカーの会場には多くのパビリオンが建てられ、そのうちのいくつかは現在も残っている。先述したようにこの年に合わせてメモリアル・チャーチが再建され、三〇〇周年記念碑がＡＰＶＡの寄贈した土地に建立されるなど、この年を契機としてジェイムズタウンが「正史」に占める位置は確固たるものとなったのである。さらに一九三四年にはＡＰＶＡの所有地を除いてジェイムズタウン島全体がColonial National Historical Park

の一部に組み入れられ、合衆国自体の嚆矢としての地位を、いわば国家によって保証されてゆく。三五〇周年（一九五七年）にはヴァジニア州が国立公園局とともに記念祭を開催し、イギリスのエリザベス女王も臨席して盛大な祭りとなった。この年、Jamestown Island Visitor Center と Jamestown Festival Park（今日の Jamestown Settlement）が開館・開園している。前者はむろん国立、後者は州の運営であり、ローカルなプライドとナショナルな記憶がともに手を携えている――もしくは矛盾なく住み分けている――状況を端的に示している。三七五周年（一九八二年）にはＡＰＶＡによって所有地内の説明版が設置され、将来の四〇〇周年（二〇〇七年）の準備もすでに始まっているという。ジェイムズ砦の発見や考古学調査もその一環であり、ジェイムズタウンの伝統・記憶の再構築は、文字どおり現在進行中なのである。

註

(1) 包括的なリストではないが、アメリカ史・ヨーロッパ史に関して若干の例をあげるならば、エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編（前川啓治・梶原景昭・他訳）『創られた伝統』（紀伊国屋書店、一九九二年）、マリタ・スターケン（中條献訳）「壁、スクリーン、イメージ――ベトナム戦争記念碑」（『思想』八六六号、一九九六年）、ジョン・ボドナー（野村達朗・藤本博・木村英憲・和田光弘・久田由佳子訳）『鎮魂と祝祭のアメリカ――歴史の記憶と愛国主義』（青木書店、一九九

七年)、スコット・M・グインター(和田光弘・山澄亨・久田由佳子・小野沢透訳)『星条旗 一七七七-一九二四』(名古屋大学出版会、一九七七年)、中條献「『公的記憶』、『伝統』、『歴史』」(『アメリカ史研究』二一号、一九九八年)、大西直樹『ビルグリム・ファーザーズという神話』(講談社、一九九八年)、阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち――コメモレイションの文化史』(柏書房、一九九九年)、拙稿「アメリカにおけるナショナル・アイデンティティの形成――植民地時代から一八三〇年代まで」(『岩波講座 世界歴史』一七巻、一九九七年)など。

(2) 本稿は、「第二四回アメリカ史研究者夏期セミナー(於・愛知厚生年金会館、一九九九年八月)」のシンポジウム2「造られる記念碑、創られる記憶」において、若尾祐司先生・羽賀祥二先生と共におこなったセッションでの報告にもとづくものである。なお、本稿の特に後編をなす予定の部分については、拙稿「英雄たちの記憶――記念碑が創るアメリカ独立革命」(『i s』八二号、ポーラ文化研究所、一九九九年)を参照。

(3) *National Register of Historic Places, 1966-1991* (Washington, D.C., 1991), p. xvii. ただし評価基準(A)、(B)の括弧内の付記は、Gail Greenberg, *A Comprehensive Guide for Listing a Building in the National Register of Historic Places* (Sausalito, 1996), 3-6 による解説の一部を挿入したものであり、オリジナルの『国選史跡登録簿』には記されていない。グリーンバーグの著書は『登録簿』に史跡の登録を試みる人に向けて書かれたマニュアル本の類で、同様の書物が複数上梓されているところを見ると、権威の上でも税制上も、国選定の史跡として登録されることがアメリカにおいて重要な意味を持っていることが容易に推察される。

(4) ただし複数の所有形態の史跡もある。

(5) 『国選史跡登録簿』のホームページで見ると、現在は七万件以上となっている。

(6) たとえばノースカロライナ州に設置された州の記念標柱のリストは、Michael Hill, ed., *Guide to North Carolina Highway Historical Markers*, 8th Edition (Raleigh, 1990).

(7) スターケン、前掲論文参照。

(8) Kenneth E. Foote, *Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy* (Austin, TX, 1997). 史跡・記念碑を俎上に載せた近年の研究としては、Lorett Treese, *Valley Forge: Making and Remaking a National Symbol* (University Park, PA, 1995) も特筆に値する。

(9) Ralph M. Pabst, ed., *The Hereditary Register of the United States of America* (Phoenix, 1976) は継承協会の総覧である。なお図1以外にも、一七世紀に二つ、一八世紀に四つ創設されている。グインター『星条旗』第五章も参照。

(10) 機関紙は *Daughters of the American Revolution Magazine* (Washington, D.C., 1892-). ただし雑誌のタイトルには変遷がある。Vol. 1, no. 1 (July, 1892) - v. 42, no. 6 (June, 1913): *The American Monthly Magazine*; Vol. 43, no. 1 (July, 1913) - v. 71, no. 11 (Nov., 1937): *Daughters of the American Revolution Magazine*; Vol. 71, no. 12 (Dec., 1937) - v. 80, no. 6 (June, 1946): *National Historical Magazine*; Vol. 80, no. 7 (July, 1946) -: *Daughters of the American Revolution Magazine*. また研究書として、Margaret Gibbs, *The DAR* (New York, 1969) も参照。

(11) Lary M. Dilsaver, ed., *America's National Park System: The Critical Documents* (Lanham, MD, 1994) は国立公園局関連の史料集となっている。その他、Jane B. McQueen, ed., *The Complete Guide to America's National Parks*, 1996-1997 Edition (Washington, D.C., 1996); Russell D. Butcher, *Exploring Our National Historic Parks and Sites* (Niwot, CO, 1997); Harlan D. Unrau & G. Frank Williss, "To Preserve the Nation's Past: The Growth of Historic Preservation in the National Park Service during the 1930s," *The*

Public Historian 9 (1987)、ボドナー『鎮魂と祝祭のアメリカ』第七章も参照。

(12) 拙著『紫煙と帝国――アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済――』(名古屋大学出版会、二〇〇〇年刊行予定)序、参照。

(13) Haywood J. Pearce, Jr., "New Light on the Roanoke Colony: A Preliminary Examination of a Stone Found in Chowan County, North Carolina," *Journal of Southern History* 4 (1938). 敵対的な先住民の襲撃にあった入植者たち百数十名は近隣の友好的な先住民部族のもとへ逃げ、そこで共に暮らし、融合したと推測される。ただしその後ポウハタン族の襲撃を受けて、ジェイムズタウンの建設以前に絶滅したとも考えられる(David B. Quinn, *Set Fair for Roanoke: Voyages and Colonies, 1584-1606* (Chapel Hill, 1985) など)。

(14) John Marshall, *The Life of George Washington: Commander in Chief of the American Forces, during the War which Established the Independence of His Country, and First President of the United States / Compiled under the Inspection of Bushrod Washington, ...Containing a Compendious View of the Colonies Planted by the English on the Continent of North America, from Their Settlement to the Commencement of that War...*, 5 vols. (Philadelphia, 1804-1807). ヴァジニア・デアに関するマーシャルの本文中の正確な表現は次のとおりである。"About the same time the first child of English parentage was born in America." (p. 13)

(15) Abiel Holmes, *The Annals of America, from the Discovery by Columbus in the Year 1492, to the Year 1826*, 2nd Edition, 2 vols. (Cambridge, Mass., 1829). 初版は一八〇五年。一八二〇年にも改訂版が出ている。

(16) James G. Wilson & John Fiske, eds., *Appletons' Cyclopaedia of American Biography*, vol. 3 (New York, 1887), 240; John H. Brown, ed., *The Cyclopaedia of American Biographies Comprising the Men and Women of the United States*, vol. 4 (Boston, 1901), 124. 彼の最初の妻はイェール大学学長の娘であった。また生理学者にして詩人のオリバー・W・ホームズは彼の息子である。

(17) *Appletons' Cyclopaedia*, vol. 3, 698; *The Cyclopaedia of American Biographies*, vol. 5, 44.

(18) Edwards Lester, *Our First Hundred Years: The Life of the Republic of the United Sates of America, Illustrated in its Four Great Periods: Colonization, Consolidation, Development, Achievement* (New York, 1875).

(19) *Appletons' Cyclopaedia*, vol. 5, 240-241; *The Cyclopaedia of American Biographies*, vol. 6, 468. シェイクスピア学者、劇作家としても名を知られる彼女は、著名なジャーナリストで反奴隷制の活動家でもあったアルバート・D・リチャードソンと再婚しているが、この婚約に憤った前夫の凶弾によってアルバートは致命傷を負い、結婚式は彼の死の床で執りおこなわれている。

(20) Abby S. Richardson, *The History of Our Country: From its Discovery by Columbus to the Celebration of the Centennial Anniversary of its Declaration of Independence* (Boston, 1875).

(21) Woodrow Wilson, *A History of the American People, Illustrated with Portraits, Maps, Plans, Facsimiles, Rare Prints, Contemporary Views, etc.*, 5 vols. (New York, 1902).

(22) ロアノーク植民地の史跡保存・顕彰に関する包括的な研究は、William S. Powell, *Paradise Preserved* (Chapel Hill, 1965). 同書は郷土愛の学問的発露といえるが、今日の史跡・記念碑研究の源流とも位置づけられうる。

(23) *Ibid.*, chap. 3.

(24) 表6-2の協会の中心人物が著した、Edward G. Daves, "Raleigh's 'New Fort in Virginia'," *Magazine of American History* 29 (1893)、その他、Stephen B. Weeks, "Raleigh's Settlements on Roanoke

Island: An Historical Survival," *Magazine of American History* 25 (1891); Talcott Williams, "The Surroundings and Site of Raleigh's Colony," *Annual Report of the American Historical Association for the Year 1895* (1896) など、一九世紀末にはロアノーク植民地の史跡について学問的な関心も高まりを見せている。また、Charles W. Porter Ⅲ, "Fort Raleigh National Historic Site, North Carolina," *North Carolina Historical Review* 20 (1943) も参照。

(25) John W. Wayland, *History Stories for Primary Grades* (New York, 1923, c1919).

(26) "The Baptism of Virginia Dare," *North Carolina Teacher* (North Carolina Education Association), vol. 6, no. 7 (1930): 272-273.

(27) Roanoke Island Historical Association?, "The Lost Colony: Announcing an Essay Contest for All Students in North Carolina High School, 1587-1937, What Became of the Lost Colony," (Manteo, 1937)。この史料は一枚の紙（シート）である。失われた植民地のその後の運命について可能性をいくつか指摘しており、優れた回答を寄せた高校生には二つの協会によって賞が与えられた。

(28) ただし第二次大戦中の五年間は上演が中止されている。

(29) ロアノーク植民地に関する今日の研究水準を示す著作として、Quinn, *Set Fair for Roanoke*; David Stick, *Roanoke Island: The Beginnings of English America* (Chapel Hill, 1983) などがあげられるが、両者とも "America's Four Hundredth Anniversary Committee" に協賛して出版されている。また、Gertrude S. Carraway, "D.A.R. Tours for Tourists: The South Beckons the Tourists," *DAR Magazine* 68 (Dec., 1934): 715; Daniel W. Barefoot, *Touring the Backroads of North Carolina's Upper Coast* (Winston-Salem, 1995), 146-173 などの記述は「観光」の観点から興味深い。

(30) "The first indications of a permanent settlement in their country, seem to have excited the jealousy of the natives." 本文中に見られる他の関連の記述は、"The first expedition for the southern colony..." (p. 22); "They ... agreed to make their first establishment upon a peninsula, on its northern side." (p. 24)

(31) "This is the remarkable epoch of the arrival of the first permanent colony in the Virginia coast." (p. 126)

(32) "...permanent establishment of the colony of Virginia" (p. 39)

(33) Lester, *op. cit.*, 40.

(34) この他にもメモリアル・チャーチの横（ジェイムズ河方向）に二つの記念碑が設置されているが、現在発掘中のジェイムズ岩の領域内にあるため実見できなかった。しかしうち一つはポカホンタス像の台座で、像は発掘のために取り外されて、教会を挟んで反対側に設置されている。*DAR Magazine* 66 (Jan., 1932): 19 には一九〇七年に十字架の記念碑を建立したことが記されており、これがさらにもう一つの記念碑である。

(35) APVAは会報として *Year Book of the Association for the Preservation of Virginia Antiquities* (Richmond, 1896-) を発行している。この協会については、James M. Lindgren, "'Virginia Needs Living Heroes': Historic Preservation in the Progressive Era," *The Public Historian* 13 (1991) も参照。

(36) Sara B. Bearss, *The Story of Virginia: An American Experience* (Richmond, 1995), 48.